

インタビューで目指す豊かな自己形成

- 他者と自己に問う体験型倫理の授業実践 -

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇（倫理）

1 はじめに（生徒を「惑わせる」こと、生徒が「一生考え続ける」こと）

教師になりたての頃に聞いた、ある先輩の先生の「公民科の授業では、生徒を惑わせたいよね」というフレーズが、妙に心に残っている。なるほど、生徒が主体的に考えることを促すような授業ができればいい、と私もその場では同意した。短絡的で安易な、快・不快で行動しがちな生徒たちを見れば、その通りと思える場面も少なくない。しかし、「惑わせる」ことだけが、はたして公民科の授業の究極の目的なのだろうか。生徒は、家庭や学校や社会の諸関係の中で、すでに大いに悩み、戸惑っているのではないか。さらにジレンマを強要し、生徒が頭を抱えた時点でチャイムが鳴るような授業ばかりだとしたら、むしろそれは不誠実ではないだろうか。その生徒たちが、主体的に学ぶ意欲や態度、問題解決能力に劣っている部分があるのならば、なおさらでは。だからといってただ答え（らしきもの）を生徒に注入しさえすればよいのか。私は、何か釈然としないまま教壇で試行錯誤を続けてきた。

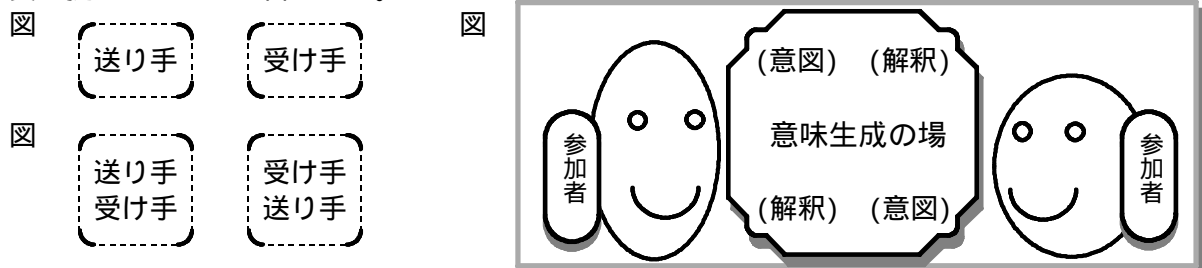
そして今、自分なりの授業に対する姿勢が見つかりつつある。それは、生徒に「人間としての在り方・生き方」について「一生考え続ける」ことの大切さを理解させたい、ということである。また、そのために「あることがらについて考える」→「今この時点での自分の考え（答え）を見つける」→「それを疑うことから、再び考え始める」というサイクルの重要性を理解させ、この終わりのない過程をあきらめない強さを身に付けさせたい、と考えるようになった。生徒の立場から考えれば、受動的な「惑わされる」から、能動的に「考え続ける」ことへの転換である。このような目的を達成するためにはどのような授業が考えられるか、以下は一つの試みである。

2 主題設定の理由とその方法について

（1）インタビューという方法について

生徒たちには、「考え続ける」ために、他者へのコミュニケーションの回路が開かれた思考方法を身に付けさせたい。そこに、他者と自己に問うサイクルが生まれると考えるからである。そこで、「インタビュー」という「他者に問う」方法を考えた。最近の若者についてよく問題視される「コミュニケーション能力」を少しでも伸長させたいということも目的の一つである。

コミュニケーションという場合、以下の三つのモデルが考えられる。一つ目は、図 1 の送り手が受け手へ正しく情報を伝えるという電気通信の分野で考え出されたモデルである。言語を媒介として正確に情報を伝達することが唯一の目的と考えられている。二つ目は、図 2 の双方向モデルである。いわゆる「ことばのキャッチボール」という状態を指す。しかし、双方向といっても結局は一方通行のやりとりの往復に過ぎない。ゆえに、音声言語によるコミュニケーションの本質を捉えているとは言えない。



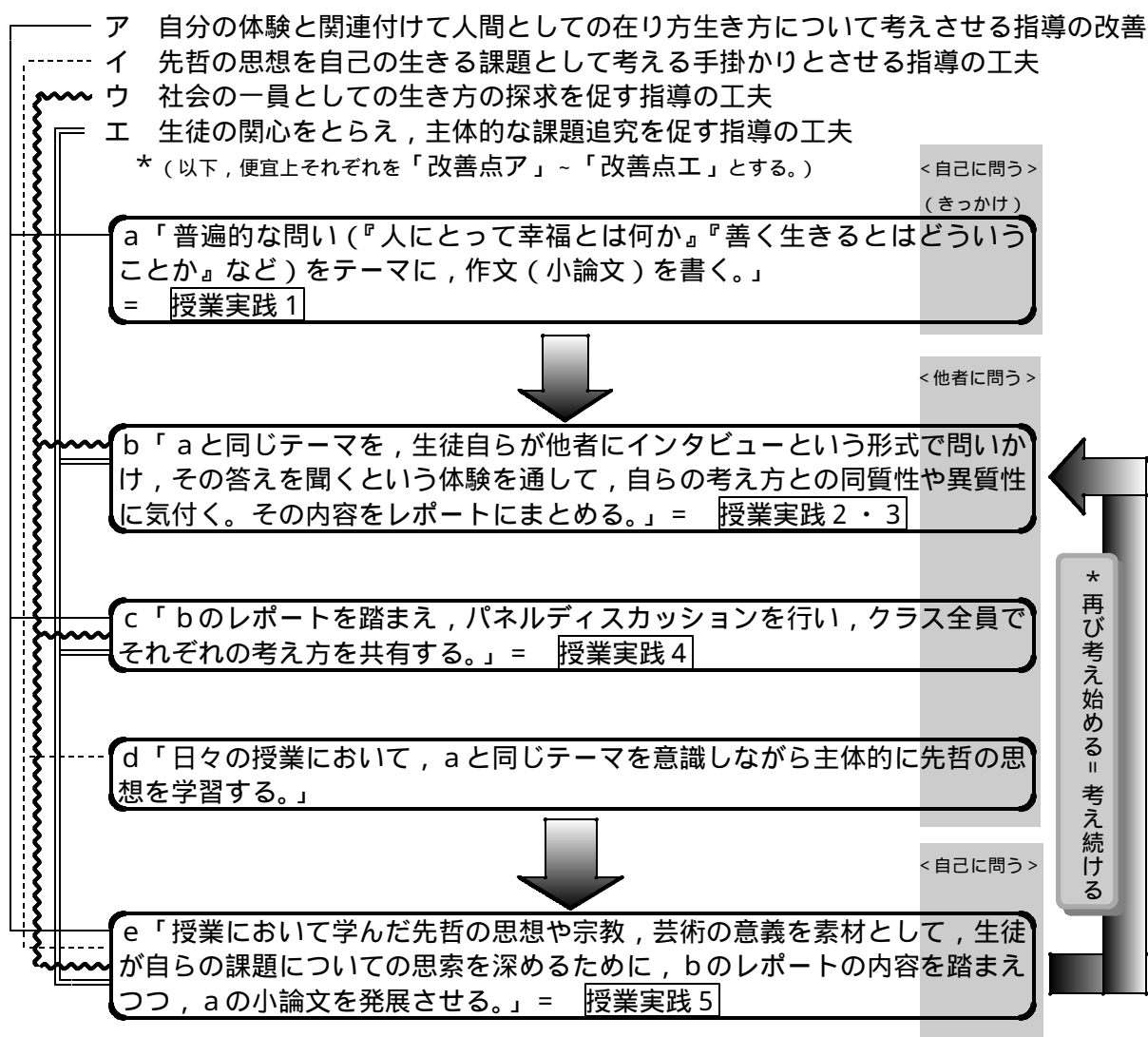
前記の二つのモデル以上に私が重要視したいのは、図 3 の相互作用モデルである。これは、コミュニケーションを、参加者が相互作用を通じて「意味」を作り出す過程ととらえる考え方である。送り手は同時に受け手ともなるために「参加者」となり、意味は、話し手の「意図」と聞き手の「解釈」が重なって、両者の間に新たに生成されると考えられる。このモデルに則して授業でインタビューというコミュニケーションの一手段を用いるとき、生徒がただ教師の説明を受動

的に聞く授業とは異なった、生々しい意味生成の場ができ、そこで生徒に自分とは違う考え方についての理解、または他者への共感が生まれ、概念や思考様式が変容するのではないかと考えるのである。そして、回答者（参加者としての）もインタビューを通じて変容し、両者に親密な関係性が育まれることだろう。つまり、生徒と回答者の間には、ただ「問い」、ただ「答える」というインタビューの一般的な認識を超えるような、ドラマティックな意味生成の場が生まれるに違いないと考えるのである。さらに、インタビューが一つのツールとして、その後の授業の展開に重要な意味をもたらすように展開したい。以下の(2)ではその位置付けを考察した。

（注：コミュニケーションの相互作用モデルについては、村松賢一氏の「国語科におけるコミュニケーション能力の育成 - 音声言語教育の現状と課題 - 」という論文を参考にさせていただいた。）

（２）主題・研究方法と現在の倫理という科目における問題点・改善点との関連性について

平成１７年１１月に高等学校教育課程実施状況調査が行われた。これは、学習指導要領に定める内容のうちペーパーテストで行うことが適当なものについて、抽出された高等学校の生徒を対象に調査を行ったものである。そして、その結果を踏まえ、倫理に関して国立教育政策研究所教育課程研究センターは以下のア～エの改善点を掲げた。そして、これらは今回の私の授業実践と目的が合致し、評価の基礎付けともなり得ると考えられるため、以下のように関連付けてみた。



図中のaの実践において、生徒は「年間テーマ」を確認し、その時点での自分なりの考えを小論文や作文にまとめる。まず「自己に問う」のである。その後、自分自身では答えの出ない問いを「他者に問う」ために、bの実践である「インタビュー」を実施する。そして、そのインタビューによって得た知識や経験を、cの実践においてクラス全員で共有化する。日々の講義形式の

授業（dの実践）においても、生徒たちは年間テーマを意識しながら、先哲の思想を手掛かりとして思考する。つまり、生徒はインタビューや共有化の内容と、授業で得た知識を結びつけながら思考し続けるのである。また、教師にも、年間テーマとの関連付けを心がけることで、日々の授業の方向性をはっきりと持てるというメリットがある。そして最終的には、aと同じテーマでありながら、より成熟した内容となるはずであるeの実践における小論文を、1年間の学習の総まとめとして書く。つまり、再び同じテーマを「自己に問う」ことになる。そこには、インタビュー等の体験が、1年間の授業での知識・理解や共有化によって補完された重く価値のある言葉として記されるはずである。そして何よりも、かつての自分の考え（aの小論文）と今の自分の考えの変化に対する「驚き」があるはずである。この「驚き」こそが、「考え続ける」ことへの喜びや耐性となると考えるのである。また、生徒はその時点での暫定的な「答え」を確認する。この答えから出発して、再び「考え続けていこう」と決意してくれることが理想である。

3 授業実践

(1) 授業実践 1

…「幸福とは何か・幸福な人生とはどのような人生だと考えるか」というテーマで、自分なりの考えを小論文で論じる。（1時間）

1年間の最初の授業の時間を、「幸福とは何か」という「年間テーマ」を伝え、そのテーマをまず自己に問い、それをまとめていく時間とし、またどのように授業を進めていくかのガイダンスを行った。小論文は、こうした抽象的なテーマに慣れずに数行で終わってしまう生徒もいたが、時間いっぱい使って自分なりの考えをまとめようとする生徒が多かった。この時点で、小論文への評価は行わなかった。その後の思考の変容の基準とするものだからである。

ガイダンスでは、1年間を通してこのテーマを常に頭の片隅において、いろいろな思想家や宗教などの考え方を学びながら、考え続けていこう、そして年度最後の授業で再びこのテーマで小論文を書いてみようということを生徒たちに話した。

(2) 授業実践 2

…「幸福とは何か・幸福な人生とはどのような人生だと考えるか」というテーマで、身近な大人として、先生にインタビューし、レポートを作成する。（3時間）

ア 授業展開（1時間目）

評価の観点（○関心・意欲・態度、□思考・判断、資料活用・表現、知識・理解）

段階	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価及び留意点
導入 10分	・本時と今後のインタビューの授業の展開を理解する。	・生徒全員が授業に参加する態度になっているか心がける。	○説明を真面目に聞く姿勢がある。
展開 30分	・「考え続ける」ためにどのような方法があるか、それぞれの長所は何かについて、自分の意見を発表する。他者の意見をよく聞き、プリントにまとめる。 ・なぜ「インタビュー」なのかを理解する。 ・自由にグループに分かれる。 ・どの先生にインタビューをお願いするか、その希望を話し合う。 ・グループごとで、インタビューのマナーや心がけについ	・意見を積極的に述べるよう促す。 ・適時、ヒントを出し、生徒の気づきを促す。 ・他者の意見をよく聞くよう促す。 ・生徒全員が意義をよく理解するように心がける。 ・生徒の人間関係に配慮する。 ・意見交換が活発になるよう、机間巡視を的的確なアドバイスを与える。	的的確な回答ができる。 ○積極的に発表し、また他者の意見を尊重する姿勢がある。 □ヒントによつて的確な回答に辿りつける。 ○リーダーとなる積極性がある。 ○意見を述べ、また聞く姿勢がある。 □知識やこれまでの経験から思考し、的確な回

	て話し合い，その後クラス全体で答えを共有する。	・意見を積極的に述べるよう促す。 ・マナーの重要性について，生徒指導の一環という意味も含め，十分に指導する。	答に辿りつける。
まとめ 10分	・改めて，本時の内容をきちんとプリントにまとめる。 ・次回の授業の展開を理解する。	・きちんとプリントをまとめる時間とすることで，改めて次回からの展開の重要性を理解させる。	□的確にプリントをまとめられている。

「『考え続ける』ために，どのような方法があるか，それぞれの長所は何か」という発問に対しては，「本を読む」，「インターネットで検索する」，「誰かに尋ねる」，「複数で話し合う」などの意見があり，それぞれの長所を的確に答えることができていた。

→ 「他人に自分の疑問を「問う」ことは，自分の知らないことを教えてくれるチャンスにもなります。また，自分の考えと同じことを他人が考えていたという検証（確かめ）にもなります。さあ，人生の先輩でもあり，身近な大人でもある先生方にインタビューをしてみましょう。」

というメッセージを生徒へ伝え，なぜインタビューなのかということ意識付けた。

→授業後，各グループの希望を踏まえ，重複のないようにインタビューをする先生の調整を私が行った。

イ 授業展開（2時間目）

まず，あらかじめ重複しないように調整し決定した，実際にインタビューを行う先生をグループごとに伝えた。

→「インタビューの技術」として，より詳しく話を聞きたいときの言葉を，状況を設定しながら生徒に問いかけつつ答えを引き出し，また，説明した。

♪ 相手から言葉を引き出す魔法の言葉

《5W1Hの「WHEN」にあたる質問の仕方》

Q：「先生の心の変化（時間的な変化）につっこんでみたいときの魔法の言葉は何だろう？」

…「先生は，いつごろから～と考えるようになったのですか？」

《5W1Hの「WHY」にあたる質問の仕方》

Q：「理由を訊きたい時の魔法の言葉はなんだろう？」

…「なぜ，先生は～と考えるようになったのですか？」

《5W1Hの「HOW」にあたる質問の仕方》

Q：「方法を訊きたい時の魔法の言葉はなんだろう？」

…「どのようにすれば，先生のおっしゃるような幸福になれるのでしょうか？」

《その他の質問の仕方》

Q：「比較してより話を引き出す魔法の言葉はなんだろう？」

…「私は～と考えるのですが，先生はどうでしょうか？」

「本には～と書いてあるのですが，先生はどうでしょうか？」

Q：「もっとくわしく話を聞きたいときの魔法の言葉はなんだろう？」

…「先生のおっしゃった～のお話をもっと具体的におききたいのですが？」

→これら5つの「魔法の言葉」を，実際のインタビューで必ず一度は使うことという指示を出し，グループごとに練習をさせた。

→休み時間，放課後を利用し，まず先生にアポイントメントをとり，いよいよ実際にインタビューを行うことを指示した。その際に，詳細なメモをとることを指示した。また，次回の授業中にレポートをまとめるが，その評価規準・基準について分かり易く説明をした。

ウ 授業展開（3時間目）

インタビューのメモをもとにして，レポートを作成することを指示した。

→レポートと同時に，「インタビューをして先生の話聞き，自分の考えの変わったこと，深まったこと」をまとめさせた。

エ 検証

< アンケート結果 >

問) 先生へのインタビューに、意欲的に取り組むことができましたか。

とても意欲的だった	やや意欲的だった	全く意欲的ではなかった
18人	17人	2人

(37人中)

問) インタビューの準備、実行、まとめを通じて、意識の変化はありましたか。

とても楽しく思えてきた	少し楽しく思えてきた	少しつまらなくなった	とてもつまらなくなった
14人	21人	1人	1人

(37人中)

問) 先生へのインタビューは、「幸福」について深く考えることについて参考になりましたか。

たいへん参考になった	少し参考になった	全く参考にならなかった
21人	14人	2人

(37人中)

< レポートの評価 >

提出されたレポートに対して、評価を行い生徒に返却した。その際に、以下の基準を設けた。

【評価について】

< 評価規準 >	
・自分はどのように生き、どのように他者とかわっていくのかという考察が、他者に問うという行為の意味を理解し、適切な社会性をともなっている。(「改善点ウ」に関連して) ・生徒自身の主体的な課題追究が、インタビューという方法を適切に用いてなされている。(「改善点エ」に関連して)	
< 評価基準 >	
(インタビューに関する評価を基準 , レポートの技術・表現に関する評価を基準 , レポート内の考察に関する評価を基準 とする。)	
A : 十分満足	・基準 について、その場で質問を工夫し、より深く回答を引き出そうとしている。 ・基準 について、生徒と回答者がお互いコミュニケーションの参加者として意味を生成していることがうかがえるような臨場感(ニュアンス)が表現されている。 ・基準 について、客観的な比較がなされ、主体的な考察に回答が大いに生かされている。 → Bよりもさらに、このいずれかを満たしており、十分満足である。
B : おおむね満足	・基準 について、意欲があり、技術についても「魔法の言葉」を正しく使用できている。 ・基準 について、インタビューを行った先生の幸福観を論理的に理解できている。 ・基準 について、自分の考えと比較し、インタビューの内容を主体的に考察できている。
C : 不十分	基準 , , について、いずれかが不十分である。

A 10人	B 22人	C 5人
-------	-------	------

(37人中)

< レポートより > (各文章とも抜粋・ほぼ原文のまま・各コメントと評価を記載)

先生へのインタビューの時、とっても緊張して、心臓が早鐘の様に打っていたのがわかった。でも話し始めると、先生の優しい声やより詳しく話してくれた人生に、少しずつ私は落ちつきを取り戻していた。このインタビューを通して、本当に人生は深いとあらためて考えた。

人生とは苦難に満ち溢れ、悲しみの連続だと考えていた子供な私。でも話を聞いていけば、徐々に私の固定観念はとけ、「人生にだって幸せを見出せる」と考えました。

だから今回、私はインタビューできて本当にうれしく思います。

評価 A (基準 が十分満足)

臨場感のある、よいレポートです。「徐々に固定観念はとけ」という部分に、新しいあなたの考えの生まれる瞬間を見るようです。これからどんな幸せの形を描くのでしょうか？

まったくちがう価値観の人に触れて、逆に自分の考えを深く考えるようになった。

今のクラスや世の中では、すこしでも「普通」からはずれた意見を出せば、否定されてしまう傾向にあると思うが、一体その判断の基準となっている「普通」とはなんだろうとも考えてみた。個性や独創性がどうと言う大人がたくさんいるが、「普通ならこんなことしない」とか言われた

ら、何に対しても後退気味になってしまうと思う。

「幸福とは心のあり方。人それぞれ。」それを聞いて気が楽になった。

評価 A

(基準 が十分満足)

「幸福とは何か」ということを考えているうちに、新しく「普通とはなんだろう」という疑問に発展している部分がとても素晴らしい。考えていく価値のあるテーマだと思います。

* 人生は深く考えすぎず、単純がちょうどいいのだと、先生は食べるのが好きで作るのが好き、それが幸福だと考えている。俺自身、そんなものなのかなあーと思った。実際そうなのかもしれない。楽しいのが幸福。その通りだと思う。自分はよく深く考えすぎる。少し見習っていこうと思う。“少し”なのは、深く考えすぎるのも“経験”だと思うからである。

評価 A

(基準 が十分満足)

(クラス全体にコメントした。下記参照のこと。)

【事前指導も含めて工夫したポイント】

生徒指導上の観点からも、インタビューのマナーについて、生徒自らに気付かせ、徹底させた。

「なぜインタビューなのか」という理由付けと、1年間の倫理の授業の中での位置付けを事前指導の中ではっきりさせた。

「質問力」を向上させるために、「魔法の言葉」などの問う技術を分かりやすく生徒に明示した。

私から、回答者（質問される側）となる多くの先生方に、授業の目的を理解していただくための説明を事前に行った。

【実践後に気付いたこと・反省】

生徒の積極的な参加が多く見られた。

これは、アンケートの結果や評価に表れている。生徒たちは意義を理解し、意欲的に取り組めたようだ。しかし、インタビューを単なるイベントにさせないために、次の授業への橋渡しをもっと工夫しなければという私の側の反省もあった。生徒の高揚は、私自身の次の展開への重要性を痛感させるものだった。レポートについても、冷静で客観的な自己評価なども有効だったかと思われる。今後へ生かしたい。

回答者に戸惑いやてらいがあった。

興味深かったのは、インタビューに対応して下さった先生方のなかに「そんな質問わからない」「考えたこともない」といった答えに終始した方がいらっしやったことである。その先生は、生徒に邪険にした訳ではなく、とても真摯に質問を受け止めてくださった結果そういう回答になってしまったとのこと。一応、別の先生に変更して生徒にインタビューをさせたが、このことはかえって先生方も生徒と共に考えることに参加して下さっていたのだ、ということが実感されたので、その旨を該当グループ全員に話し、納得させた。また、運良く本校の先生方の協力を得ることができたが、事前に趣旨を理解していただく努力は怠ってはならないと実感した。

生徒の不満や戸惑いに、かえって「新たな気付き」が隠されていた。

生徒は、テレビドラマや泣ける物語にあるような言葉を先生方から聞ける、と妙な期待をしていたのだろうか。インタビューの後に「先生、こんな答えでいいのかな」と言って来た生徒がいた。回答者の先生は、とてもシンプルに生活に即した「幸福」を語ってくださっていた。(上記*印のレポート参照)。このエピソードからもうかがえるように、生徒はこうした人生について重要な問題を、大人よりも深刻に複雑に考える傾向がある、ということに気付いた。「大人になるということは、こうした問いを、シンプルに考えるようになることかもしれないよ」という私自身の新しい気付きを、次の授業の時間に生徒全体に述べるきっかけともなった。

回答者に変容があった。

これは、嬉しい誤算でもあった。インタビューに応じてくださった多くの先生方から、そのようなケースも含めて、多くの反応をいただいたことである。そして、先生方が、インタビュー中の生徒たちの様子やご自身が語った幸福観を楽しげに語っていた放課後の職員室の光景は、この授業が先生と生徒との関係を少しでも近付けることに成功したと思われるものだった。その日一日は学校中が(生徒も先生も)「幸福ってなんだろう」と考える非日常的な一日だった、とは大袈裟だろうか。

(3) 授業実践3

…「幸福とは何か・幸福な人生とはどのような人生だと考えるか」というテーマで、身近な大人として、保護者にインタビューし、レポートを作成する。(1時間)

ア 事前指導

生徒に、夏休みを利用して「幸福とは何か・幸福な人生とはどのような人生だと考えるか」という質問を保護者にしてくれるように指示を出した。

イ 検証

<アンケート結果>

問) 保護者へのインタビューに、意欲的に取り組むことができましたか。

とても意欲的だった	やや意欲的だった	全く意欲的ではなかった	
15人	19人	3人	(37人中)

問) 保護者へのインタビューは、「幸福」について深く考えることの参考になりましたか。

たいへん参考になった	少し参考になった	全く参考にならなかった	
24人	10人	3人	(37人中)

<レポートの評価>

提出されたレポートに対して、評価を行い生徒に返却した。評価規準及び基準は、「授業実践2」のレポートのものを踏襲した。

A 8人	B 22人	C 7人	(37人中)
------	-------	------	--------

<レポートより 父と母へのインタビュー>(各文章とも抜粋・ほぼ原文のまま・コメントと評価を記載)

・「どのような青春時代(青年期)を送ったのか、教えて下さい」

友達と旅行や遊びが楽しかった。電気関係の学校で勉強し、東京都大会で3位になったことが自分の自信になった。

・「青春時代には、「幸福」についてどのように考えていましたか、教えて下さい。」

友達と遊んだり、家族と過ごせる時間を幸せだと感じていた。あと、学校生活を充実して過ごすことかな。

・「今は、どのように考えていますか。青春時代とどのように違いますか。」

家族が、何にでも困ることなく楽しく毎日を過ごせること。健康であること。青春時代との違いは、自分が親になって、自分自身だけではなく、家族全員のことを考え、何不自由なく毎日を過ごす幸せを大切だと考えるようになったこと。

・自分自身の考えの変化について

父や母の話を聞いて、幸せについてまたあらためて考えることができました。自分と同じ考えだったり、違うところがあったり、いろいろな考えを知ることができよかったと思います。また、青春時代の興味深い話や楽しい話を聞き、自分自身や家族のことをあらためて考えることができました。

お父さん、お母さんへのインタビューはとても貴重な体験になったと思います。お二人が、家族の幸福をとても大切に考えていることを理解できたと思います。「自分と同じ考え」や「違うところ」を具体的に記述し、それに関して自分の考えをより深められると、より良かったと思います。

評価B

【事前指導も含めて工夫したポイント】

「幸福とは何か」という質問の前に、回答者への予備知識の重要性から、また、スムーズなコミュニケーションのために、今回は「どんな青春時代(青年期)を送ったのか、教えて下さい」という質問をまずするように生徒に提案した。

「授業の一環としてインタビューにご協力下さい」という趣旨の文書を作成し、インタビューの前に保護者に渡すように指示した。

プライバシーに踏み込むような、相手が聞かれたくない質問は控えるようにと指導した。

【実践後に気付いたこと・反省】

多くの生徒にとって、貴重な経験となった。

多くの生徒が意欲的に保護者へのインタビューに取り組み、参考になったとアンケートに答えている。正直なところ、「インタビュー」ではなく、生徒が保護者に「紙に書いておいて」とごまかしてしまったらという危惧はあった。しかし、レポートを見るときちゃんとインタビューを行ったことがうかがえる。しかし、保護者との関係が複雑でどうしてもインタビューを実行できなかったという生徒がいたことも事実であり、精神的なフォローを心がけ、また「授業実践2」とは別の先生へのインタビューを行ってこれに代えたこともあった。そういう意味では確かに冒険ではあったし、この方法への疑念も自分自身にあったが、最終的に「保護者に幸福観を問う」という貴重な経験になってくれたことは事実のようである。ただし、生徒と保護者との関係についても様々なタイプがあるので、きめ細かい配慮が必要であった。

保護者から、「貴重な経験になった」という感想をいただいた。

事後、レポートの片隅に感想を書いて下さった保護者の方が5名ほどいた。「青春時代を思い出し、またその頃と現在の幸福観の違いを子供と見つめなおした経験はとても楽しかった」という趣旨のものばかりだった。保護者の方への感想・意見のプリントを別に用意すれば、より貴重な資料（私にとっても、生徒にとっても）になったに違いないと反省し、またこうした感想をいただいたことは、私にとってもこの手法への自信となった。

「家族の幸福＝最終的な答え」という図式化を超えるような授業の必要性を感じた。

保護者の多くは、当然ではあるが、「質問者の生徒の保護者」という立場で回答する。レポートを見るとほぼ全ての回答が「回答者の幸福＝家族の幸福」という内容であり、そこに安心感を覚えたのか、より深い質問や意見の交換は「授業実践2」より少なく、よって評価も全体的に低下した。これは生徒に対して不満点であった。

そこで、このレポートを返却するときに、生徒には「ここでとどまっては考え続けることにはならない、個人・家族の幸福という視点は獲得できたが、他人の幸福・社会全体の幸福という視点が抜けているのではないか」という疑問をぶつけた。これは「改善点ウ」の視点でもある。今後、授業ではこの新たな視点をもって先哲の思想を学ぼうと方向付けた。「改善点イ」との関連付けでもある。また、生徒が「社会における自己の生き方」という視点を獲得するための意見の共有化という必要性を痛感したので、人前で話すのが得意な生徒が数名おり、その他の多くは苦手としているというクラスの現状も考え、パネルディスカッションを試みることにした。

(4) 授業実践4

… 授業実践2・3のインタビューをふまえ、パネルディスカッションを行い、クラス全員でそれぞれの考え方を共有する。(2時間)

ア 授業展開(1時間目)

評価の観点(○関心・意欲・態度、□思考・判断、資料活用の技能・表現、知識・理解)

段階	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価及び留意点
導入 10分	・パネルディスカッションのやり方と意義を理解する。	・生徒全員が授業に参加する態度になっているか心がける。	○説明を真面目に聞く姿勢がある。
展開 30分	・5人のパネラーは、自分のインタビューのレポートをもとにして、自分なりの「幸福」についての考え方を発表する。 ・聞く側は、パネラーの意見を聞きつつ、質問事項をまとめておく。	・司会として、パネラーに意見を積極的に述べるよう的確な質問をするなどして促す。 ・他者の意見をよく聞くよう促す。	(パネラー) ○的確な回答ができる。 ○インタビューの経験とそのレポートを最大限に利用し、自分なりの言葉で表現できる。 (聞く側) ○他者の意見を尊重する姿勢がある。 □パネラーの発言の趣旨を理解し、論理的にかみ合う質問を考えることができる。

	・ パネラーに対して質問をする。 ・ 聞く側からも意見を述べる。	・ 議論が活発になるよう促す。 ・ 論旨のかみ合わない質問に対しては、適宜議論の軌道修正を行う。 ・ 普段おとなしい生徒にも、議論への参加のきっかけをつくる。	○ 積極的に意見を述べ、また聞く姿勢がある。 □ 知識やこれまでの経験から思考し、議論に参加できている。
まとめ 10分	・ 議論の内容をまとめる。 ・ 次回の授業の展開を理解する。	・ その後の授業の貴重な資料となるので、議論をきちんとまとめておくよう注意する。	□ 的確にメモをまとめられている。

イ 授業展開（2時間目）

前回のパネルディスカッションの内容を踏まえ、レポートにまとめさせた。

エ 検証

< アンケート結果 >

問) パネルディスカッションに、意欲的に取り組むことができましたか。

とても意欲的だった	やや意欲的だった	全く意欲的ではなかった	
22人	14人	1人	(37人中)

問) パネルディスカッションは、「幸福」について深く考えることの参考になりましたか。

たいへん参考になった	少し参考になった	全く参考にならなかった	
30人	5人	2人	(37人中)

< レポートの評価 >

提出されたレポートに対して、評価を行い生徒に返却した。その際に、以下の基準を設けた。

【評価について】

< 評価規準 >

- ・ 自分の体験と関連付けて、パネルディスカッションをさらなる自己理解と他者の意見を尊重する場として生かしながら、自身の考察に生かしている。（「改善点ア」との関連して）
- ・ 自分はどういうように他者とかわって生きていくのかという考察が、他者との意見交換の中で適切な社会性をともなっている。（「改善点ウ」に関連して）
- ・ 生徒自身の主体的な課題追究が、パネルディスカッションという方法を適切に用いてなされている。（「改善点エ」に関連して）

< 評価基準 >

A：十分満足	下記の基準	を満たし、さらに自分自身の変容をよく認識しているなど十分満足である。
B： おおむ ね満足	・ 基準：パネルディスカッションにおいて、他者の意見・考え方を正しく理解できている。 ・ 基準：他者の意見を自分自身の意見と比較したうえで、論旨に一貫性がある。	
C：不十分	基準	について、いずれかが不十分である。

A 14人	B 10人	C 9人	(37人中)
-------	-------	------	--------

【事前指導も含めて工夫したポイント】

パネルディスカッションの意義を「他者の考えを学ぶ大切な『場』」であると理解させた。

- ・ インタビューの内容とそれによって変質した自分の考えを「まとめ」、「語る」ことに意味があると説いたこと。

- ・ 「色々な幸福観を聞こう」という動機付けをしつつ、様々な考えを共有化・全体化することで再び自分の考えが変容・深化する意義を説いたこと。

なるべく多様な意見がでるように、パネラーの人選に配慮した。

【実践後に気付いたこと・反省】

パネルディスカッションの難しさを痛感した。

パネラーの考えが予見できない状態で始めた。その意見の方向性を見定めながら、発言を引き

出す質問をしたり、内容をかみ合わせるような司会をすることは非常に難しかった。次回への反省として、小道具としてマイクを使用するなどすると、発言者と聞き手を聴覚的および視覚的に整理できて有効かと思う。また、各パネラーとは事前に打ち合わせ、その意見の方向性をはっきりさせておく方がよいと痛感した。生徒も混乱していたらしく、評価結果の分布が大きく拡散してしまった。私の準備不足で、まさに「惑わせる」ことにのみ終始してしまった感がある。

生徒は、パネルディスカッション自体を興味深く、また楽しんでいた。

のような私の困惑をよそに、生徒は「イベントとしてのパネルディスカッション」に積極的に参加していた。アンケートでも積極的に参加したことが表れており、また参考になったと答えた生徒が30名と非常に多かったことは救われた気分であった。

生徒は、インタビューによって身近な大人の意見を聞いたが、それをもとに実はクラスメイトと意見を交換したがついていたのだということに気付いた。そして、自分の独断ではなく、インタビューという行為をとおして「幸福」という概念が明確になりつつあるからだろうか、発言した生徒たち全員の言葉に普段以上の力と確信がこもっているように感じられた。

(5) 授業実践5

…「幸福とは何か・幸福な人生とはどのような人生だと考えるか」というテーマで、授業実践1で作成した小論文や、今までのインタビュー、パネルディスカッション、1年間の授業を踏まえ、最終的な小論文を書く。(3時間)

ア 授業展開

生徒には、「卒業論文だ」と大袈裟に言ったが、あながち外れてはいないと思う。高校3年生、18歳の「幸福論」を仕上げるために、多くの生徒たちは授業の3時間分では不足、私から多くの追加の原稿用紙を受け取り、家庭に持ち帰って机に向かったようである。

イ 検証

<小論文の評価>

提出された小論文に対して、評価を行い生徒に返却した。その際に、以下の基準を設けた。

【評価について】

<評価規準>

- ・青年期にある自己の変化など自分自身の体験と重ね合わせて、具体的に自己理解を深められている。(「改善点ア」に関連して)
- ・先哲の思想を、自己の生きる課題と関連付け、その基本的概念の具体的な理解ができている。(「改善点イ」に関連して)
- ・自分はどのように生き、どのように他者とかかわっていくのかという考察が、他者に問うという行為の意味を理解し、適切な社会性をともなうなされている。(「改善点ウ」に関連して)
- ・生徒自身の主体的な課題追究が、インタビュー、パネルディスカッションという方法を適切に用いてなされた後、それが自己の洞察に反映されている。(「改善点エ」に関連して)

<評価基準>

A : 十分 満足	・下記の基準 について、それぞれの資料が一環した意味を持って関連付けられている。
	・下記の基準 について、自身の変容についての驚きが原動力となって、「考え続ける」ことの大切さにまで認識がおよび、またその決意が表れている。 → B よりもさらに、以上のいずれかを満たしており、十分満足である。
B : おおむ ね満足	・基準 : 今までの授業実践・授業内容を踏まえ、それらの記録(レポート等)を資料として適切かつ有効に利用できている。
	・基準 : 「授業実践1」の小論文と比較して、自分の考えにどのような変化がおきたか、またどのような深まりがあったかを、論理的に説明できている。
	・基準 : 原稿用紙5枚以上の記述がある。(上限はなし。)
C : 不十分	基準 , , について、いずれかが不十分である。

A 18人	B 17人	C 3人 (37人中)
-------	-------	-------------

<小論文より> (一部省略・ほぼ原文のまま・下線は木村による・コメントと評価を記載)

ちょうど一年前の自分はいったい何を考えていたのでしょうか。たった一年前に書いた小論文なのに、自分自身の考え方や感じ方の変化が起こっていたとは、びっくりしました。その小論文で私は、「幸せ」とは暖かい家庭を持つこと、と書いていました。人と人とのつながりやそこから来る安心感・信頼感、互いを必要とし必要とされているんだという感覚こそが幸せなんだ。その人間関係の基礎となっているのが家庭であるから、私は暖かい家庭を持ちたい。以前の私はこんな考えだったようです。今現在も、根本的な信頼感や安心感が幸福につながっているという考えは変わっていません。しかし、自分自身でもびっくりしてしまう程の変化があったのです。それは、暖かい家庭＝結婚＝幸福という捉え方で、幸福を終着点として考えていたということです。結婚や家庭を持つことに到達するまでの過程のことには、一年前の小論文では一切ふれていませんでした。とてもメルヘンチックで、現実味や具体性がないなあと、三年生になった私は感じました。なぜ、自分の書いた作文のはずなのに、こんな感想をもつようになったのでしょうか？私の気持ちや考え・捉え方にどのような変化があったのか、またその変化を導いたものはなんだったのか、今回の小論文を通して自己分析してみたいと思います。

まず、一つ目のキッカケとなったのが、物事を違う視点から見てみてはどうかという、ひと言です。この言葉は〇〇先生へのインタビューの中で使われていた言葉です。〇〇先生は、「幸せとはその人の心だ」と話して下さいました。同じことでも一人一人の感じ方や考え方によって「幸せ」とも「不幸」とも受け取れるそうです。また、そのように考え方を変えていくことで、周囲の人のことも考えるようになっていったそうです。〇〇先生は、中学生の頃にスポーツを通して学んだそうです。インタビュー以前の私が考えていた幸せが「家族」や「仕事」などを持っている、という自分をとりまく環境の充実だったのに対して、必ずしも恵まれた環境ではなくとも、自分自身の捉え方一つで幸福感を得られると気付かされたのです。学校という同じ環境を与えられたとしても、自分の姿勢しだいで、吸収できる量も質も変わっていくんだと考えるようになりました。

次に私は、自分の捉え方や考え方で不幸とも幸福とも感じるができるなら、考え方を変えていけば、自分に起こった不幸なことや嫌なこと乗り越えていけるのではないかと考えました。ちょうどその時に、自分の親へのインタビューの宿題があったので、私はどのようにして苦難を乗り越えてきたのかも聞いてみました。

父は、高校時代の体操部の練習がとても辛く逃げ出したくなることが何度もあったそうです。しかし、父は、祖母から聞いた特攻隊の話が忘れられず、練習を続けたそうです。自分と同世代の若者達が、自分の好きなこともできず、死んでいったことを思えば、部活動での苦しみなど苦にはならないと歯を食いしばったのです。今でも辛いことがあると特攻隊の話を思い出そうそうです。

母の考える幸せは、「心からの笑顔が見られた時」だそうです。子供が生まれてから、なかなか自分の時間が持てずに苦しんだ時期もあったそうですが、ある日、子供と一緒に思いっきり遊んでみようと考え、一緒に大声で笑ってみたそうです。すると、子供の笑顔を見た瞬間、一気に気持ちが楽になったそうです。この話を聞くまで私は結婚に対して、楽しく、幸せそうな側面だけしか想像していなかったことに気づきました。幸福へたどりつくまでの長い道のりは、想像している以上に険しく苦しいのかもしれません。

また、私はクラスメートとのパネルディスカッションを通してまた新しい発見をしました。今まで私が重要だと考えていた精神的な視点に対して、最低限生活ができるだけの収入を得ることが幸せの条件だという物質的な視点がでてきたことは、考えを広げていくうえで大きなヒントになりました。なぜこうした考えが私の頭には浮かばなかったのでしょうか。この時、私は少し怖くなりました。「当たり前」という前提で物事を見ていると、いつの間にか大事なことを見落としてしまうのではないかと気付いたからです。最初のうちは感謝や大切さを分かっている、その環境が当たり前になっていくと、感謝すらしなくなる。自分の現状をふり返らずにはいられませんでした。

また、取り巻く状況や時代によっても幸福の形はちがうのではないかという意見も出てきました。もし、自分が戦時中に生きていたとしたら、「生きのびる」「命を守る」ということを最大の課題とすると思います。そして、お腹いっぱい食べることを、幸福だと言うかもしれません。

せん。空襲におびえずにぐっすり眠りたいと願うかもしれません。これらは、マズローという学者の説によれば、低い段階の欲求かもしれませんが、切実な願いでしょう。今この瞬間も、世界のどこかで戦争は続いています。けれども、いくら自分の気持ちしだい幸福だと思えたとしても、一人の力だけでは変えることのできない環境もあると思います。核への危機感を世界によびかけたラッセルや恒久平和ということ考えたカントのような哲学者の思想も学びました。今の私一人の力ではなにも変えることはできませんが今回の授業を通して自分の周りだけでなく、もっと広い視野で考えることを学びました。最初は自分の周りの人々への感謝と思いやりから、社会全体へ一人一人の思いやりの心が染みわたっていくことが、私の思う幸せへの第一歩だと思います。

考え続けたら最初の作文のときより、「幸福」の輪郭はぼやけてしまったけれど、「幸福」までの道は見えてきました。また十年後くらいにこの小論文を読み返す日を楽しみに生きていきたいです。

評価A（基準 いずれも十分満足）

一年前の小論文を読み返した時の驚きから始まり、倫理の授業で実践したインタビュー、パネルディスカッション、普段の授業から色々な考え方を学びんできたこと、そしてその結果として自分自身の考え方がとても深まったことがうかがえます。考え続ける決意が読み取れる、素晴らしい卒業論文です。

< アンケート結果 >

問)「幸福とはなんだろう」というテーマの授業を受け、これからも「考え続ける」という決意が・・・

できた	少しはできた	あまりできなかった	まったくできなかった
22人	11人	3人	1人

(37人中)

【実践後に気付いたこと・反省】

生徒が、最後まで明るく前向きに考え続けてくれた。

原稿用紙が次々となくなっていく。10枚書き切った生徒が6名いた。5枚に満たなかった生徒は2名のみであった。本校の生徒の現状を考えると、本当によく頑張ったと思う。

内容面でも、上記のように、自分の変容に驚き、考えを深めていく様子が見える素晴らしい小論文がいくつもあった。つたない部分が多々あることも承知している。しかし、下線部のような文章を読むと、いくつかの実践や普段の授業から吸収したことが「生きる知識として身に付いた」と言えるのではないだろうか。倫理という科目の原点を見るようで襟を正す思いだった。

アンケートで多くの生徒が「考え続ける」ことを決意してくれたことがうかがえた。

アンケートによると、この「卒業論文」がゴールなのではないということをよく理解してくれていると思う。「幸福とは何か」という生徒の興味関心をひく年間テーマを設定できたことも、このような結果が出た原因かと分析している。違うテーマでもぜひ、挑戦してみたい。

4 おわりに

インタビューという方法を用いた実践を行っていく過程で、これが他の教科・科目、特別活動などでも活用できるような汎用性の高いものだということに気付いた。

しかし、実践が進むにつれ、生徒にインタビューさせることが目的ではない、ということにも気付いた。はじめにも書いたが、この実践は、生徒が「考え続ける」ように変容することを目的としている。上記の小論文に『幸福』の輪郭はぼやけてしまったけれど、『幸福』までの道は見えてきました」とある。この生徒は「他者に問う」、色々な考え方に触れて「惑わされた」後、再び「自己に問う」ことで「道」が見えたのだと考える。この道筋が、「一生考え続ける」という決意によって引かれたと考えられるならば、この一連の実践および日々の授業が意味を持ったものとして浮かび上がるだろう。さらにこの生徒が、中学校の後半を不登校でほとんど授業を受けていないことを考えると、より強い説得力をもって言葉の一つひとつが迫ってくる。そして、何よりも私自身が「一生考え続ける」ことを止めてはならないという決意を問われている気がする。そういった意味でも、この方法や授業の在り方がベストだとは思わない。今後は、より良い「他者に問う」方法や「自己に問う」方法がないかを模索していきたい。

最後に、2年間にわたって御指導・御助言をいただいた千葉県教育庁教育振興部指導課の指導主事、教科指導員の先生方をはじめ、県立〇〇高等学校の諸先生方および平成19年度3年4組の生徒諸君に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。平成20年度から〇〇高校として生まれ変わる県立〇〇高等学校への思いと共に。